



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「山口昌男氏の、（仮設）書物の神話学」展会場計画レポート
Author(s)	片桐, 保昭
Citation	市立小樽文学館報, 23, 16-19
Issue Date	2001-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30124
Type	journal article
File Information	otaru23-16.pdf



「山口昌男氏の、(仮設) 書物の神話学」展 会場計画レポート

片桐保昭スケープスタジオ代表 片桐保昭

市立小樽文学館で著名な人類学者の展覧会を行うという。ついでには会場の基本的な配置の筋道を整理してほしいという。私の専門は造園学であり、インテリアや文学ではない。しかし造園というのは視覚環境をデザインしていく行為でもある。環境への感受性が無くては私の分野は成立し得ない。その人間の感受性はどこからくるのか。そういったことを思う時、人間や文化、歴史といったことを避けては通れない。

私が仕事の間とする公共造園の分野では、歴史や社会に対する感受性は立法や官庁の答申といった形で考察の余地無く啓示されるため、特定の人物の個人的な感受性を設計や計画に反映させることはない。この意味においても特殊な仕事であるため私はボランティア（志願兵）として喜んでお引き受けすることにした。

文学館で人類学者のコレクションを公開するというところにどういった意義があるのかはこの展覧会全体の中で私の任務が関知するところではない。

デザイナーとして私が遂行しなくてはならないことは、この小樽というマチの文学館という舞台で行われる展覧会のインテリアが、無理なく必然性をもって来客に意識してもらえ空間を提示するということであると承った。奇異でもなく凡庸でもない形で、しかも大小に関わらず感動をもって人々の感受性に受け入れられるためには、文学館の立地する環境の成立とその環境と人間の心性の係わり合い、つまり文学館を取り巻く小樽市街とそこに暮らす人々の感受性の成立についてわきまえておかななくてはならない。

そこで、本論では歴史を追って文学館の建物と小樽市が人々にどのように受け入れられてきたかの歴史を追ってから後に計画に取り掛かることにした。話をいつから始めるか。

Rapoport(1990)⁽¹⁾は社会システムが連続しているか否かという観点から、任意の環境デザインを考察する際に数千年前の太古の時代から始めるということは無意味であると指摘している。今回の場合、現在との連続性を考慮すると、アイヌの時代から始めても得るところは無い。今日の小樽市の風景が成立した頃から始めるのが妥当であろう。

1 小樽のモダニズム建築とコロニアリズム

明治の御政変以来欧米を範とした植民地主義のおかげで近代的都市となった小樽の繁栄を支えたのはさらに北へ、満州へと発展する日本の植民地主義であったということが出来る。

明治37年、明治39年の二度の大火⁽²⁾以降、小樽市の都市計画は条里制を基準とした産業都市のそれとなり、公共の建築物は西洋式の石造建築であり、倉庫などの港湾施設や有力企業の建物も防火状の理由からそれに倣うこととなっていた。⁽³⁾

明治22年以降の色内町埋め立て、大正三年の小樽運河建設開始、日露戦争の勝利による日本の貿易の増大とともに現小樽文学館が立地する界限は北のウォール街とまで呼ばれる経済センターとなった。現在の小樽市を象徴する景観はこの時期に形成された。

当然北海道、満州などには当時の日本の余剰人口が引き寄せられるところとなる。

大正から昭和初期にかけて流行したプロレタリア文学にも小樽を舞台としたものが多い。

また、江戸時代までの歴史性を欠き、西洋式のインフラから始まった小樽は、その異国性をロマンティズムへと昇華させた文脈で語られることも多い。

2.戦後小樽の経済的停滞

我が国が手痛い敗北を喫した終戦はまた、我が国の対外的膨張政策の終焉も意味した。もはや小樽を支えた植民地主義は無い。物流基地としての小樽の重要性は戦後低くなるばかりであった。昭和36年の小樽市産業振興計画委員会の編集になる「産業振興の基本構想—中間報告—」中には既に札幌と比較して小樽経済の停滞をどうするかが討議されている⁽⁴⁾。

実際小樽市の人口は現時点に至るまで減り続けているのが現状である。

3.小樽文学館の建物の沿革

小樽文学館の庁舎は昭和二十年代に貯金局庁舎として建設された⁽⁵⁾。建築学会や小樽市の歴史的建造物の調査報告書などをあたってみたが、建築史関係では紹介されている事例はない。名建築としては認識されていないということである。

設計者は通信省経理局営繕課（現郵政省）の職員、小坂秀雄であった⁽⁵⁾。通信省は現在でも自前の建築設計部課を持ち、その性格上明治時代より欧風の設計思潮を取り入れるのに熱心であった。

小坂秀雄は役所内の建築家に留まらず、一般の建築界にその有能さを幅広く認知されていた。ホテルオークラ本館の共同設計（1962年）にも乞われて参加している。代表作には東京通信病院看護学院（東京、1950）があり、一見平凡のようで、しかも尽きぬ斬新さをもつ意匠と評価されている⁽⁶⁾⁽⁷⁾。

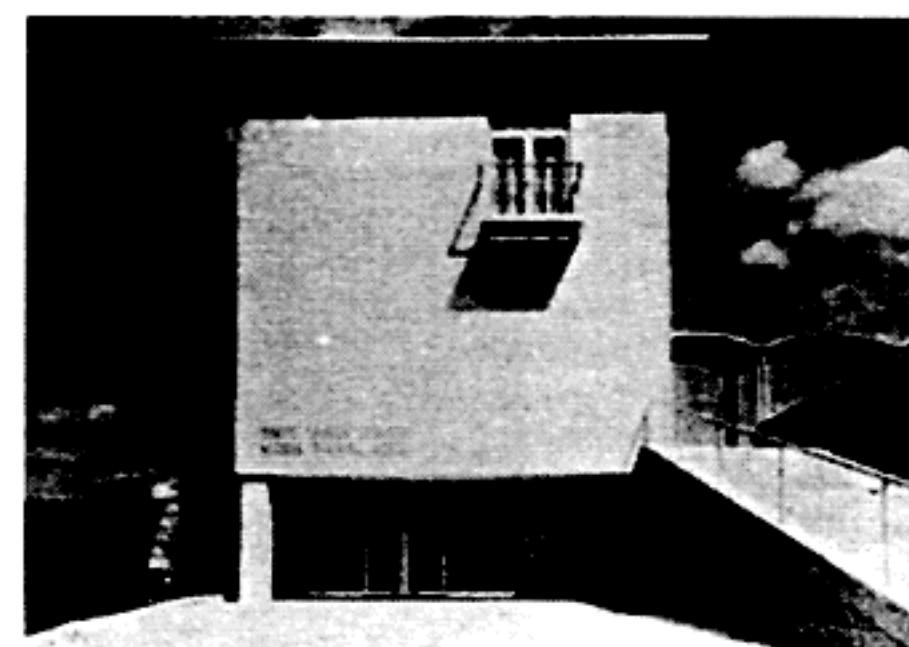


図1.東京通信病院看護学院⁽⁷⁾

昭和二十年代は日本が米軍の統治下にあった時代である。小坂秀雄は占領軍が行った教育改革の結果生まれた戦後第一世代の技術者であり、また、日本を欧化するための組織でもある日本官僚の一員でもある。植民地化の尖兵がまた軍隊によって蹂躪された制度から生み出され

るという歴史の皮肉である。

4. 都市景観への心性の変化

文学館周辺は現在は観光名所となり、小樽運河や石造建築群は遠き昔を偲ぶものとして有名であるが、建設された当初はもちろんそのような眼差しで建物などを鑑賞する者などいなかった。最新鋭の技術で新築されたばかりのピカピカしている建物にノスタルジーを感じる者などいない。小樽の「斜陽」とともに時代に取り残されてしまった街並みが新たに景観資源として見られるようになった結果である。その感受性が変化する過程は文学作品中の記述を追うことによって大体明らかにすることが出来る。

水守龜之助(1886-1958)が著し、大正15年(1926年)に出版された「我が墓標」という小説では黎明期の活気溢れる小樽市街の様子が様々描写されている。小樽祭の夜、主人公が寄場の親方の娘と逢い引きする際の小樽港の情景は簡潔ながらロマンティックなものである。

小樽祭がやつて来た。それは北海道の祭の中では、札幌に次ぐ華やかなものだった。埋立地で花火を打ちあげたりして、大變にぎやかだった。

(中略)

その夜は思い出の多い埋立地の方へ二人で歩いて行って、楽しい語らひに時をうつした。港の燈火は去年と變りなく輝き月も同じように照つていた。⁽⁸⁾

同年に林房雄(1903-1975)が著した「林檎」は、職にあぶれた者たちがうろつく悲惨さに異境としての冬の小樽港を重ねた描写がある。これは著者がプロレタリア文学に傾倒しているため、悲惨な場面を強調したのであろう。いずれにせよ、この時代の小樽市街はノスタルジーという文脈で鑑賞されるような対象ではない。

降り続いた雪が珍しく晴れた日曜日、空には白い光が満ちて、街が透明な硝子のように美しい。油煙で紫色になった家々の軒から、解けた雪の欠らが輝き落ちて、それが光の中でびちびちとはねかえる。アカシヤの梢に近く、櫓の鈴の音がからんからんと響こうと言う風景。

北海道に来てまだ二週間にならぬ内地人の僕には、こうした景色は珍しい。

(中略)

冬が深くなるにつれて、函館、小樽、室蘭—あらゆる港の街々に失業者の絶望的な市が立つ。⁽⁹⁾

昭和16年(1941年)に豊田三郎(1907-1959)が発表した「林檎畑」において、文学作品中では初めて小樽市街が「古めかしい」と表現されるようになる。ここで注意したいのは「古めかしい」ということが何らかの正の印象を示すものではないということである。このころでもまだ古めかしいだけで、それが美しさと結びついてはいない。

私は小樽の街を歩いた。蒼く潮風の吹き込んだ古めかしい建物がぎっしり竝んで、紺碧の海の方へ傾いていた。明神様の境内から、ささやかな湾内と、赤くさびた船腹をのぞいて六月の太陽に汗ばんだ額を冷やし

た。⁽¹⁰⁾

古さと美しさが結びつくのは昭和54年(1979年)の夏堀正元の「海鳴りの街」あたりからである。このころに小樽の街がノスタルジーをもって見られるようになる。この「海鳴りの街」が出版された時期は小樽運河を埋め立てるか、保存するかという議論が全国的に注目を浴びていた頃で、小樽市民も埋め立て賛成、反対に二分されていたことを当時市内の中学に通学していた筆者もはっきり記憶している。

小樽というところは、古色蒼然とした運河風景ゆえに美しい、北国のうらぶれた街だ、あそこは間違いなく衰滅していく都市の悲しい美しさがある。そのシンボルが運河風景だ。

(中略)

ときたまここにやってくる中央の文化人連中にとっちゃ、小樽は明治、大正期の古くて美しい絵葉書のような街なのさ、所詮はただ、それだけのことなんだ。

⁽¹¹⁾

5. 人類学と植民地主義

1859年にパリに人類学協会が設立されたのが、人類学という学問分野の最初である。ヨーロッパやアメリカなどの近代国家植民地主義が第三世界の博物誌を必要とし、人類学の発達もその文脈の中での出来事と捉えることが出来る。事実、今日ヨーロッパ諸国に散在する多くの民俗博物館の資料は、この時代に収集されたものが多い⁽¹²⁾。博物館は明らかに帝国主義の所産であるといえるのである。今日においては帝国主義などというものは既に魅力のないものになっているにも関わらずである。

帝国主義は過去のものとなったが、その収蔵庫はかつての帝国のごとく文物を欲し、かつての帝国のごとく、第三世界の事物を再構成する役割を持ち続けているとBarringer(1998)⁽¹³⁾は指摘している。

小樽(及び北海道の諸都市)の成立が植民地主義の発展の中での現象であることを思うと、知的好奇心の行使が制度化された学問の発達との相似をみる事が出来て興味深いものがある。

しかし西欧諸国および日本の繁栄を支えてきた植民地主義は現在ではまったく経済発展に寄与しないものとなり、建造物や博物館に往時を偲ばせるよすがが残されているのみである。

6. 個人的な情熱の方向について

加えて人類学には人間社会の一見役立たずな事物や理解できない事象を考察し、失われたことや忘れ去られたことを浮かび上がらせ、正當に評価するということがある。植民地主義の落とし子であり、既に時代に取り残されているこの小樽文学館の建物で、人類学者のコレクションを公開するということは、充分に正當性のあることなのである。

小樽文学館の特徴を見ると、天井は高く、窓が天井まで届いている。その窓から南西の日が射してくる。博物館の展示は日光の直射をきらうものだがこの特徴を殺すのは良くない。

太陽の光を展示に取り入れた最初の例としてロンドン万博のテーマ館である水晶宮が挙げられる。

植民地主義の時代はまた産業革命の時代でもある。

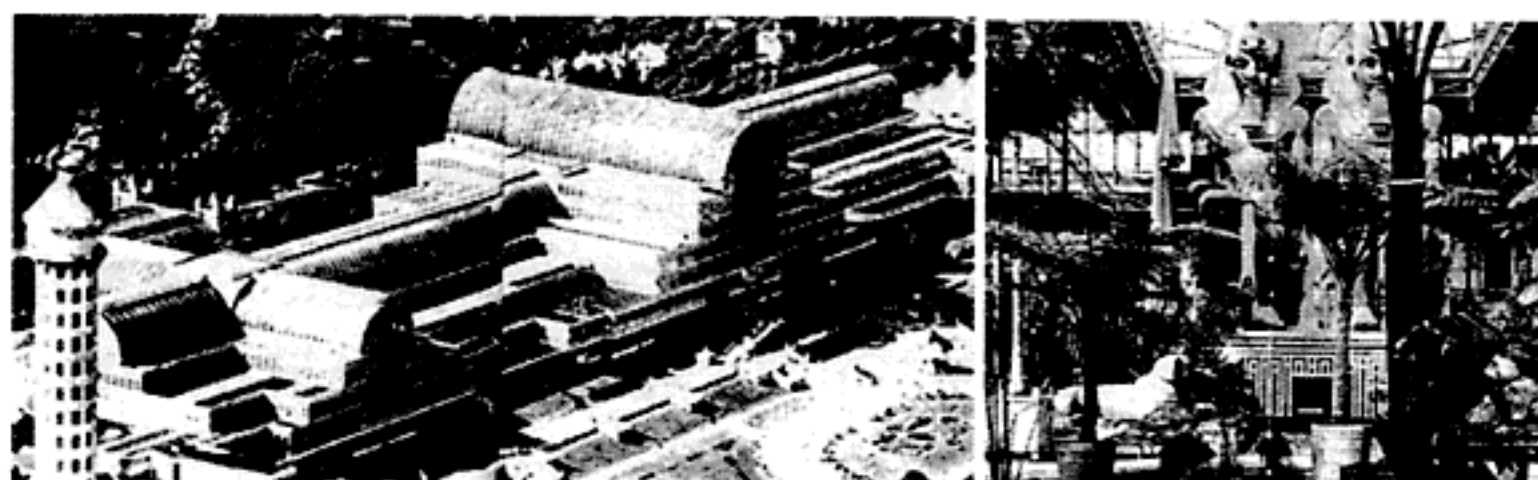


図2.水晶宮の全景⁽¹⁴⁾

図3.水晶宮の内部⁽¹⁴⁾

1851年に開催された最初の万国博覧会であるロンドン万博は躍進する大英帝国の植民地政策の成功を内外に示した一大イベントであった。

その博覧会場である水晶宮を設計した造園家のジョセフ・パクストンは、英国の技術的、経済的繁栄が作り出した新興中産階級の出身で、いわば典型的なセルフ・メイド・マン（叩き上げ職人）であった。⁽¹⁵⁾

十九世紀初めには既に鉄とガラスの建物は存在していたが、純粋に展示目的の光の空間というアイデアはこの水晶宮をもって嚆矢とされる。水晶宮は建築の意味を大きく変えたのである⁽¹⁶⁾。

彼が設計した鉄とガラスの大温室には当時のイギリス先端技術を駆使した蒸気機関を利用した各種機械などとならび、植民地むけの奴隸用手枷や足枷、手錠や鎖まで出品されていた⁽¹⁷⁾。

この鉄とガラスの建築による壮麗さの演出は1853年のニューヨーク万博でも再現され、1875年のエッフェル塔のデザインにもヒントを提供している。今日でもガラスのホール等にはこういったデザインが多用されることは言うを待たない。

しかし今回の展示は万国博覧会のような華やかな性格のものではない。時代は変わり、私達は機械文明を称揚し過ぎた結果恐れるべき破壊がもたらされることは充分に知ってしまった。

むしろ今回の展示は植民地主義が生んだ学問、建築、街並みという道具立てを用いて、まったく地味なものに光を当てるといったものである。それまで失われていたものや不当に貶められていたものに光を当てるといふ、人類学の目指すところに一致するものである。そこには植民地主義と鉄やガラスといった機械文明の象徴といった感のある道具立てが、小樽という植民地主義の忘れ形見的小都市で見え隠れするという、皮肉な空間が現れるのである。

人間の営みというものは、多かれ少なかれこういった矛盾を孕んでいるものではないだろうか？ だから私たちは常に立ち止まり、自分たちの立脚している社会を反芻し、これからの糧としていかななくてはならない。過去を振り返り、或いは全く違う社会を生きる人々の様から何かをつかみ取るのである。その行為は真理を明らかにすると同時にことの善悪を問わず自らをさらけ出す行為なのでもある。喜びというよりはむしろ苦痛を伴うものといった感がある。

真理を前にはしゃいでいるようでは、真理には近づけないのでは無かろうか。置き去りにされたかのような堆積の中から珠玉を取り出す。既に顧みられなくなったことどもを相手にするわけであるから、当然脚光など浴びることはない。

その置き去りにされた様は、植民地主義、膨張主義から見捨てられたこのコンクリート造の、かつては確かに輝いていた建築物のなかで、その輝きをレジティメイトしていたロンドン万博に始まる技術文明の象徴を得て、来訪者の感性に訴えるのである。

この種の懐かしさは輝かしい一時を経験したものが共通に味わうものであり、それは豊かさや暖かさといった気持ちと繋がっているのであろう。この建物は、時代に取り残された建築物であることを考えると、奥まった空間に本が堆く積み上げられそこに日が射しているという、なにやら懐かしいような落ちつくような部屋を提供するのが孤高な老碩学をいただくにふさわしい空間と考えた。

今まで述べた種類の情動を経験できるようなようなデザインをどう作るか。大なり小なり空間というものは、私達一人一人にとっては時間と共に移動と共に目の前に表れては消え、また表れては消えてゆくものである。この意味においては空間を経験するということは音楽を鑑賞するという行為と同じである。必然的に空間計画は音楽を構成していくという行為と同じとなる。

所与の要素、つまり建物の特徴はコンクリート、鉄、ガラスからなる窓と壁である。これらは文明の象徴であると同時に、過去への懐古の象徴でもある。この空間を基礎として、混沌の空間を抜けて暖かで、懐かしい、そして密やかなる感動を味わうというシーケンスを設定した。

予算が無いので、混沌の空間イコール暗い空間、感動の空間イコール明るい空間と仮定して、その明暗を分節した空間を作り、光と陰のコントラストを強調した空間を分節する装置は本が並べられた本棚を使用した。

陰の部分は出来るだけ暗く、窓に面した空間は太陽光を可能な限り取り入れ、光が横溢する空間とした。

非日常の空間であること暗示するため、天井の高い展示室を伽藍に見立て、天井まで届くかのような大きな本棚を想定し、伽藍によく見られる垂直性を強調することとしたが、予算がないので既存の本棚の上部に張りぼてを継ぎ足すという手法をとった。この張りぼても予算がないため、ボランティアの人たちがあり合わせの材料を継ぎ接ぎしてつくった素人風のものになった。

展示室は鉄筋コンクリートの柱が空間を分断してしまっていて現状では不評であるが、撤去は出来ない所以この柱の配列のリズムを基準として、本棚で囲まれた空間を分節した。

観客の経験シーケンスをまとめると

・その1

入り口に立つと、薄暗い通路に書物が連続している空

間が認識される。

・その2

右手に明るい空間（受付）があり自ずと受付に向かう。

・その3

受付を過ぎると垂直に納められた書物の先に窓が見え、光が差し込んでいる

・その4

更に奥にいくと左手方向に暗い通路を挟んで展示が続いており、その果てに南向きの明るい窓が輝いている。クライマックスを意識させられる。

以上である。

これらその1からその4に至る四つの経験はもちろん展示室の空間を分節する鉄筋コンクリート柱によって明快に分割されたリズムをも来客に提供し、このリズムが展示スペース全体の統一感を醸し出すいわば背骨となるのである。

観客は分節された空間を次々とリズムカルに通過することによって暗さから明るさのクライマックスへと向かう

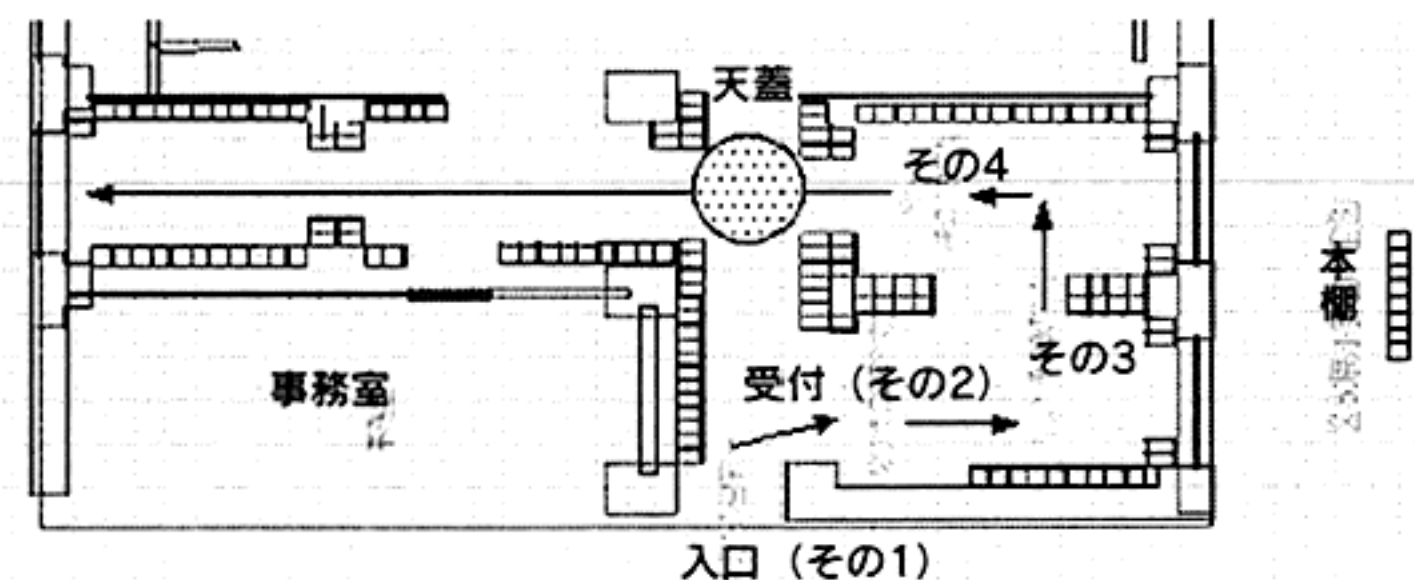


図4.書籍展示計画

う経験を無意識的に味わうこととなる。

そのリズムに光と影が加わり四つの経験が観客の移動の契機として加わるという空間体験が提供されるという仕掛けとなる。

なお、その4の経験で光の部分と陰の部分をつなぐスペースは展示場としての統一感が途切れるのを防ぐため、何らかのデザイン上の対策が必要である。展示場のリズムを反映したグリッド状の天蓋を頭上に吊るのが常套かと思われるが、新たに制作する予算が無いため障子板を上から吊り下げることとした。なぜ障子板かというと、文学館の物置に転がっていたものを流用しただけの



図5.会場1

話である。

家具の配置も分節された空間が連続するリズムに合わせた家具配置のリズムを念頭に置き、分節された小空間

の各には来客の読書に供するためのテーブル、椅子のセットを置くこととした。空間の連続性を担保するためには、同じ寸法同じデザインの物を4セット置くのがよい



図6.会場2

のだが、予算の関係で、1セットだけとなった。

以上制約の多い中で、自分としては出来るだけ努力したつもりである。

会場の設置に関わったボランティアの方々、阿部建設の方々、政村庭園の方々、展示を企画した市立小樽文学館の方々にはこの場を借りて謝意を表する次第である。

参考引用文献

1. Rapoport, Amos (1990): *History and Precedent in Environmental Design*, 1 ed., New York, Prentice Hall Press, pp14-15.
2. 小樽市史: (第二巻), pp612-pp618.
3. 日本建築学会北海道支部歴史意匠専門委員会(1994): 小樽市の歴史的建造物: 小樽市教育委員会社会教育部社会教育課, pp96
4. 岡本理一(1961): 産業振興方策について: 小樽市産業振興計画委員会編集: 産業振興の基本構想—中間報告—, pp4
5. 一原有徳(1990): かくれた現代建築: 脈・脈・脈—山に逢い、人に逢う旅, 現代企画室, pp205
6. 大川三雄、川向正人、羽田亨、吉田綱市(1997): 図説近代建築の系譜 日本と西洋の空間表現を読む: 彰国社, pp101-102
7. 初田亨、大川三雄(1991): 都市建築博覧・昭和篇: 住まい学大系43, 住まいの図書館出版局, pp182
8. 水守龜之助(1926): 我が墓標
9. 林房雄(1926): 林檎, 文藝戦線
10. 豊田三郎(1941): 林檎畑, 新潮
11. 夏堀正元(1979): 海鳴りの街, : 講談社
12. 吉田光邦(1985): 改訂版万国博覧会: 日本放送出版協会 NHKブックス, pp188-189
13. Barringer, Timm (1998): 'The South Kensington Museum and the colonial projects', in Barringer, Timm and Flynn, Tom (eds.), *Colonialism and the Objects*, 1 ed., London, Routledge, pp27
14. 松村昌家(1986): 水晶宮物語 ロンドン万国博覧会1851: リポート, p246
15. 松村昌家: 前掲書, pp105
16. 吉田光邦: 前掲書, pp50~52
17. 松村昌家: 前掲書, pp181